

英語動詞再考

——諸説の検討を中心にして——

四方田 敏

1. はじめに

Jespersen はその “Three Ranks” で *this furiously barking dog* と *this dog barks furiously* とを比較対照している。それによると、前者についてみると、*dog* が primary (一次語) で、*this* は *dog* を修飾して secondary (二次語) であり、*barking* も *dog* にかかるから、これも secondary である。*furiously* は二次語の *barking* を修飾しているから、tertiary (三次語) となる。後者について言えば、*dog* は一次語、*this* は二次語、*furiously* は *bark* にかかるから三次語である。ここまでは問題は起らない。しかし、問題なのは後者の動詞 *barks* の処置である。Jespersen は、この *barks* を主語の *dog* についての述語であるから、つまり一次語の *dog* に従属するものであるから、二次語と解釈したのである。ここにおいて、意味にとらわれて Jespersen は正しかるべき目を狂わせられたのである。

Jespersen が *Essentials of English Grammar* の “Rank” 説で言語構造の結合が hierarchy (階層) を成していることに着眼したのはさすがであるが、各々の語の結合関係をそれらの統一体としての文構造の視点から分析することをしなかったことが問題を残す結果となったのである。

そして、構造言語学は残されたこの問題点を見事に補正したとすることができる。つまり、Bloomfield⁽¹⁾ は全体としての *The dog barks* について、それは

英語動詞再考

the dog のような主格表現とも、また barks のような定動詞表現とも異なる機能を有する、つまり exocentric (外心的) であると説くわけである。すなわち、Bloomfield の立場からすれば、The dog barks では、dog と barks とが対等の資格で対立し合っていると判断されているのであり、形態を基準にして、言語構造を客観的に分析したと言えるのである。

又構造言語学者の一人である Fries⁽²⁾ は動詞を (もっとも Fries は verb という語を使わずに、Class 2 という用語を用いている) 代入 (substitution) 方式を用いて決定してゆくという行き方採っている。因みに、Fries にとっては従来の名詞に該当する語は Class 1 であり、形容詞のそれは Class 3 で、副詞のそれは Class 4 ということになる。Fries はテスト枠 (test frames) を用いて Class 2 の語を定めてゆく。

Frame A

	class	class
	1	2
(The) —		is/was good
— s		are/were

Frame B

	class	class	class
	1	2	1
(The) —		remembered (the)	—
— s		wanted	— s

Frame C

	class	class
	1	2
(The) —		went there
— s		came

そして、これらのテスト枠 A, B, C, の中で同じ構造位置 (structural position) を占めている語が Class 2 の words ということになる。それぞれの枠は Class 2 words の subgrouping (小群化) のために有意義であると説明される。しかし、ここでは Fries は自動詞とか、他動詞とかいう用語は一切使用していないことが注意すべきである。

又同じ *The Structure of English* p. 144 で、Fries は structural patterns of sentences (文の構造型) について書いている。Fries によれば、文の種類は、疑問文であれ、要求 (request) 文であれ、陳述文であれ、それは単なる二つの品詞、Class 1 と Class 2 の語の配列における特別の対照型 (contrastive patterns) による合図によって示される。(signalled) というのである。

Fries には成るべく意味に依存しないで、形態的に文構造を把握しようとする態度がよく見えるのである。例えば、ship sails today という語はこのままでは、陳述文でもあり、又要求文でもあり得る。何故なれば、ship と sails がどの品詞に指定されるかを決定すべき印 (markers) がまるでないからである。つまり上述の文は Class 1 ↔ Class 2 ともとれるし、又 ship という語を Class 2 の無変化の単純形が Class 1 の語である sail をあとに従える要求文とも解釈できるのである。しかし、今若し ship に *the* をつければ、この文はまぎれもなく陳述文となるのである。つまり、文の種類を知らせるといことは、語の意味の事柄でも又漠然とした文脈でもなく、単に、Class 1 と Class 2 の語の配列の対照型の事柄なのであると Fries は述べるのである。

たしかに形態を中心とした科学的な記述文法の必要は大いに評価すべきであるが、一方全然意味を無視することもできぬであろう。

例えば、He is slow to understand. と He is difficult to please. は形態的には同一に見えるが、意味はあきらかに違うのである。又、He wanted his wife to dress well と He told his wife to dress well. とは外部形式は同一であるが、これら二文の内部言語形式はあきらかに相違している。従って言語研究には言語の外部形式と内部形式の両面から考察することの必要が痛感されるのである。

本稿では、先づ動詞の本質的部分について考察し、つぎに述語構造の中で動詞のとるべき形式と機能について、新しい言語理論も考慮に入れながら論及する。

2. 動詞の実体

(a) 動詞の様相

Jespersen⁽³⁾はその“Three Ranks”で名詞を一次語として一番上位に位置づけた。何故ならば、名詞がもっとも高い特殊な意味を表わすからである。論理学の立場からすれば、名詞の外延は形容詞のそれより狭く、内包は形容詞より大きいと言うことになる。そしてこの名詞が主語となれば、当然その主語は一次語であり、又目的語も一次語になる。主語は限定されて、特殊であり、固定的に感じられる。この主語に比べると、動詞は流動的である。Sweet は動詞を「現象語」(Phenomenon word)と述べている。

例えば、come, fall, grow, die, walk, strike, see, live think などがそれである。しかし又現象性 (phenomenality) がより顕著でない語、shine, lie, sleep などもある。これらに加えて Jespersen は過程を表わすもの、become, grow, lose, die があることを指摘している。これを要するに、名詞が実体的であるのに対して、動詞は現象的であり、流動性を持っている。これが Jespersen に前述したように動詞を二次語に rank せしめたのである。意味的にみればこのように考えることができるであろうが、しかし例外もあるように思われる。It rains の場合はどうであろうか？ 主語の it は漠然としていて、意味の実体がない。真にこの文を実在的にしているのは述語動詞の rains である。従ってこの場合 rains の方が特殊であり、rank は一次語であると言うことが出来るはずである。

動詞⁽⁴⁾には又、完結性という特性がある。The dog barks と the barking dog とを比べて見れると、一つのまとまった伝達として完結しているのは前者であり、the barking dog にはそういう完結性がみられない。そしてわれわれに「その犬はどうしたと」反問させるのである。動詞は伝達の核心であると言える。われわれは時には動詞なしで伝達を行うことも真実である。

“Headache?”

“No fooling”

“Too much sun?”

“Not enough sleep.”

“Too bad.”

しかしこのような会話は長くは続かないのである。「われわれが実際に、動詞を表現しない時でさえ、われわれの用いる声の調子や、似たような文脈で用いられた動詞がわれわれの記憶となって、動詞は幽霊の如くさまようのである」と Paul Roberts は述べている。(*Understanding Grammar*, p. 110).

(b) 動詞と名詞

名詞と動詞を区別するのに、しばしば言われることであるが、名詞は物(thing)を表わし、動詞は行為(action)を表わすと言われる。

しかし、a flash of lightning (稲妻のひらめき) や War (戦争) や a man's life (人の一生) 等は、“物”なのであろうかそれとも“行為”なのであろうか。単純には解らないことである。

Evans and Evans⁽⁵⁾の言う如く“物”と“行為”の相違と言うことも現実の世界の何かが言葉に押しつけた結果のことではなくて、それは文法の考案物であって、現実の世界についてのわれわれの考え方を歪めるものである。名詞は“数”を持つ語であり、動詞は“時制”を持つ語であると言うのも、一つの明解な区別の仕方であると言えよう。

Dwight Bolinger はその *Aspects of Language*, p. 147 で興味深いことを述べている。彼によると mass (質量) と count (可算) は単に名詞のみを分ける単位ではなく、それは動詞にも適用される。動詞はその形式によって mass にもなり得るし、又 count にもなりうる。例えば、too much talking という場合には、この talking は mass である。しかし He talked for a moment では count である。何故ならばそのように“話しをする”瞬間がたくさんありうるからであ

ると言いうる。名詞や動詞が或る事 (something) の一つの場合を指示するならば、それらの場合は countable である。(a flash, he jumped など) そうでないならば mass である。(light, jumping)

以上のような考え方は名詞と動詞との親近性に触れているとみられるのであるが、この名詞と動詞の親近性ということが、英語には目立って見えるように思われる。今、仮りに辞書を手にとってページをめくってみるならば、英語の同一の語が名詞と動詞の二つの品詞を具えていることが如何に多くあるかが解るのであろう。

又、英語には名詞から動詞へと、明らかに品詞の転換が行われたとみる場合も多いように思われる。例えば、he carpeted the floor, he papered the wall, he pocketed the money, queen it, king it, foot it (歩く) go soldiering (軍人になる) window a wall, 等のような用法がある。これらは英語の表現を具象的にするという大いに効果があるであろう。名詞を動詞化しようとする意識である。名詞の特色であるところの実体感や実在感を成るべく動詞にも与えようとする指向のあらわれである。

又一方において名詞化指向の動詞の傾向も英語には prominent である。これは英語を分析的に表現しようとする傾向を表わす。それはつまり、動作名詞を目的語とする have の用法にみられる。have a good cry (思う存分泣く) have one's cry out (泣くだけ泣いて泣き止む) have a dance, have a drink, have a swim, have a look, have a try, have a bite, have a talk, have a fight, have a bath, have a rest, have a walk, have a smoke, have an argument, have a game, have a dream, have a haircut 等である。その他, give a cry of surprise, raise a hysterical cry, take a nap, take a rest, get a bite もある。特に have の場合は、have は中立的な意味を表わすのみでただそれは動作名詞の目的語をとるための手段となっているように思われる。have は動作名詞の目的語によってはじめて特殊化されるのである。しかも、have a rest 等は形式は他動詞構造であるが、一種の自動詞化がなされていると言ってもよいだろう。何故ならばこれ

を受身形にした *a rest is had by me* などと言えないことによっても解るのである。

(c) 自動詞と他動詞

他動詞といっても、意味的にみると、その他動性に差異があると言える。真の意味で、動詞が動作を表わす場合と、例えば、*I like icecream* とか *He has a big house* とか *I saw him* のように、状態を表わす状態動詞の場合とがある。言うまでもなく、状態動詞の場合には、他動性は弱くなると言えよう。

Fries はその *The Structure of English*, で “performer” (行為者) と行為を受ける者としての “undergoer” とする言葉で英語の構造的意味を記述している。しかし前述の *I like icecream* のように主語が必ずしも行為者であるとは限らない。そこで Fries は “Direct object” については、「この種の目的語において、“行為を受けるという意味” は言語的に行為を受ける型として把握されるあらゆる物を含む」のであると説明している。そしてその “行為を受けるもの” の意味範囲としては、*turn the corner, dig the holes, light a fire* などと共に、*swam a swell race, fears that examination* を例示している。つまり Fries は言語的に見た文法形式としての “直接目的語” を考えている訳である。

因みに Fries⁽⁶⁾ の挙げている “Subject” の定義に触れてみよう。第一として、主語が結びつく Class 2 の語が *be* 動詞でなく、又、機能語としての *be* や *get* がいわゆる過去分詞と結合しない場合は主語は “performer” を合図する。そしてこの “performer” は「主語的な行為者の型として把握されるものならなんでも」含むのである。例えば、

The dean approved all our recommendations

The chair tipped over.

A beautiful cloth covers the table.

のような文の主語である。

第2としては、主語が結びつく Class 2 の語 (いわゆる動詞に相当) が *be* (非常に多くの場合 *be*) であり、この Class 2 の語が主語の Class 1 の語と同

じ referent (指示物) を持つ Class 1 の語に従われるときは、(主語は“同定されるもの”を合図する。例えば、

Mrs. B seems the head person overthere now

The best bargain is the brick bungalow out on.

The Salary is three hundred a month.

のような文の主語である。

第三としては、主語が結びつく Class 2 の語が be (もっとも多く be である) であり、この Class 2 の語が Class 3 の語に従われるときは主語は“記述されるもの”を合図する。例えば、

The farewell dinner will be huge this time

My husband's afraid he won't get out in time

Maybe next summer will be better.

のような文の主語である。

第四としては、主語の結びつく Class 2 の語が機能語 be 又は get であり、それらがいわゆる過去分詞と結合するときは常に、主語は“その行為を受けるもの”又は“それに対し又はそのために行為が実行されるもの”を合図する。例えば、

Lots of tools can be furnished him right here

All the ladies were given orchids

O— was elected sheriff.

Fries は現実の世界における行為者、行為とは別次元の言語の世界における行為者、行為を考えているのである。現実の世界に対応して言語の意味を考えてゆくと、一つの問題点に逢着せざるを得なくなる。それは、Frank Palmer がその「意味論」⁽⁷⁾ で述べている問題である。

Palmer によれば、行為動詞に関してさえも、「行為者」の意味するものを明確に確定することができるかは明らかでないと言う。Palmer は M.A.K. Halliday から、General Leathwell won the battle という文を引用して、Halliday がこ

の文の *General Leathwell* を行為者としていることに関して次のように言う。

「しかし、この将軍は、いかなる意味で行為者なのだろうか。大砲を打って敵を殺し、敵陣へ進撃して行ったのだろうか、あるいは、ただ本部で座って軍隊に戦闘を進めさせていただけだったのだろうか。確実に言えることは、意味論的には将軍は行為者ではなく、「監督者」だったということである！」ここに、言語を構造的に、機能的に見てゆく Fries と、意味論的に主語をみようとする Palmer との面白い対照が見られる。

Fries からすれば、現実の世界を主語に持ち込みすぎる嫌いがあると見えるであろう。こういう意味論は現実と密着した一元的言語観のように思われる。果して、Palmer のような突きつめた考察の必要があるのか疑問である。

「行為者と行為」と「行為を受けるもの」という文の構造型で、「行為」を表わすものは明らかに他動詞である。この他動詞というものは、言語のはるか昔には、自動詞の形式を変えることによってつくられたと言われている。例えば *lie / lay*, *sit / set*, *rise / raise*, *fall / fell* 等の pair がこれを示している。こういう pair から見られるのは他動詞というのは、自動詞を使役的にしたものであるということである。*lay* はつまり、“cause to lie” であり、*set* は “cause to sit” であり、*raise* は “cause to rise” である。

Paul Roberts⁽⁸⁾ によると、近代の他の英語では、単に自動詞に目的語を付与することによって使役の意味を表現すると言われる。例えば、

自動詞 *The motor raced.*

他動詞 *He raced the motor.*

自動詞 *Edga dropped.*

他動詞 *Stanley dropped Edgar with a left to the chin.*

更に変形文法の説くところによると、例えば、*John thickened the sauce* について言えば、この文の深層構造は、*John [+Causative] [s the sauce thickened]s* ようになり、これに使役変形が働き、*s* の中の動詞 *thicken* が [+Causative]

に代入されて、上記の文が得られるということになる。ただし、このような解釈のためには主語に動作主のみを取る動詞でなくてはという条件がつくのである。しかも、この変形文法の説明によって、同一語が、自動詞と他動詞の両様の働きを持つ内的関係が理解され得ることは注意すべきである。

この自動詞が他動詞の用法を持ち、他動詞が自動詞の用法を持つ変化の現象は、アメリカ英語に顕著であるようで、尾上政次氏の「現代米語文法」にはその例が相当数示されている。今その中からそれぞれ数例を引用してみよう。

自動詞から他動詞への例

combat (=combat with) the conservatives.

wrestle (=wrestle with) any two boys

battle (=fight) Gouldism, *protest* (=protest against) the sale of munitions, *appeal* (=appeal to) the case, the cost of living could be *compensated* (=compensated for) by protective duties.

他動詞から自動詞への例

Later it *developed* (=turned out) that....., his head *raised* (=moved upward), fail to materialize, *laying* for (=lying in wait for) *locate* (=take up his residence) in Elmore, *hold* with (=agree with), *piling* out (=crowding) into the road.

(d) 他動性について

他動詞はその動詞の意味を完全にするために目的語を要求する動詞であり、そのようにしないのが自動詞であると定義される。しかし、Paul Roberts はこの定義は *misleading* であると述べて、これは他動性 (transitivity) というものが動詞の形式とそれに連合する意味 (its associated meaning) に存在するというふうにとられるからである。例えば、この見方でゆくと、“Let’s eat” はたとえ、目的語がなくとも、何かを食べないでは食べることができないから、eat は他動

詞であるということになる。又 *She sang beautifully* も、何かを歌わなければ、歌うことができないから、他動詞になる。しかし、この文脈では、どの文法学者も、*sang* を自動詞と言うであろうと Roberts は述べているのであるが、自動性と他動性の内的関係への興味がここに提起される。

これに対する一つの解釈として変形文法の視点があると思われる。*eat* の場合でも、又 *sing* の場合でも、深層構造では、深層目的語の *food* や *song* が想定されるのであるが、*eat food*, *sing a song* となると *food* や *song* の意味が余りにも一般的である。そのために、目的語削除 (Object Deletion) 変形をうけて、いわゆる “Let’s eat” とか “(She sang……)” のような無目的語の構造として現われると考えられるのである。

Leech⁽⁹⁾ の「現代意味論」によると、*John is eating* のような文は、二項陳述の文であると言う。つまり *John* が一つの項であり、*is eating* が述語であってもう一つの“空の項” (null arguments) がある。この“空の項”というのは、その指示するところが最大限に一般的であるという意味で内容を欠いているし、また、統語的な実現形を持たないので、その存在は消極的にしか認められない。そこで、通常目的語を要求する動詞が、目的語なしに使われるのであると説明される。“空の項” はまた、特性を含んでいないから、他のすべての成分の集合に対して上位語 (superordinate) である。このことから含意規則により、次のような説明ができる。

- (a) *John is smoking cigars* は、*John is smoking* を含意する。
- (b) *John is eating nuts* は *John is eating* を含意する。

このように考えると、“空の項”を仮定することが正当化される。従って、*John is eating* と *John is sleeping* という文の間には、論理的には重要な相違があることになる。後者は、意味的には形容詞的補語と同じである。*John is asleep* と同値であって真の「自動詞」を含み、1項陳述である。これに対し、前者は第

二項が「空」である2項陳述である。この辺りの Leech の説明は明快であり is eating と is sleeping の内的関係の相違についての言及は真理を含んでいると言うことができる。

他方, Randolph Quirk⁽¹⁰⁾, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, Jan Svartvick によると, He is eating の eat を他動詞の目的語省略又は削除と見ないで, “転換”(Conversion) という立場から approach している。conversion とは一つの項目 (item) が接辞 (affix) の付加なしに新しい語類 (word-class) に適合される。又は転換される派生的な process を言うのである。しかし, この“転換”も若干の他動詞に適用されるという意味で特異的なものであることに気付くのであると述べている。つまり, They're hunting deer から They're hunting への“転換”が可能であるが, They're chasing cats から They're chasing への転換はできないと説いている。これは恐らく, deer は動物であるから“鹿狩りをしている”ということは“動物狩りをしている”を含意している。ライオンでもよい。要するに“動物”という抽象的な概念に帰納できるわけである。それ故に hunt という動詞は他動詞から一般の動物を含意する自動詞 They are hunting へ転換できるのであろう。一方, chase という語は hunt (猟する) という意味にはあまり使われないうである。(カレッジクラウン英和辞典, 三省堂)。“猫”を狩るということは不合理である。chase cats は“猫を追いかける”であろう。chase はその目的語としては猫以外にも人間もとることができるし, 又 “ship” などの物もとることができる。

つまり, hunt のように“動物”という抽象的な意味を含み得ない。つまり chase の目的語となるものが, 一つの共通概念に帰納できないために, 他動詞から自動語へと転換できないと考えられるのである。

この外, *A Grammar of Contemporary English* には啓発される所論がみられる。例えば, She gives his friends expensive presents. と対比をなす She gives expensive presents. の“間接目的語”の省略については, “Conversion” であるとははっきり見ることはできないと言う。そして, 多くの動詞に伴う“間

接目的語”は、資格においては、随意的な副詞語句 (optional adverbials) に類似した随意要素とみなされ、従って省略されることがあると説明されるのである。

“Conversion”による説も一つの興味深い所見とみられるが、eat のような場合を Jespersen はどう考えているであろうか。Jespersen は *The Philosophy of Grammar* で、目的語なしの eat のような場合を、“自動的”な動詞用法とみている。そして、目的語を伴って「他動的」に用いられた場合には、目的語はその動詞の意味を特殊化するのに役立つと説明している。そして、次のような文を例示している。

She sings well.

She sings French songs,

I wrote to him.

I wrote a long letter.

He drinks between meals.

He drinks wine.

上記のペアをなしている文の上の文は、例えば、well は sing を、つまり歌い方を修飾しているが、French songs は“歌う”内容を修飾して特殊化している。副詞に比べると、修飾や特殊化の仕方が、動詞と目的語のあいだではるかに緊密な結合をなしていることが解るのである。しかし、これがいわゆる同族目的語関係をなす sing a song や dream a dream となると、修飾化や特殊化は全く見られず、動詞に含まれる意味の単なるくり返しに過ぎないことに注意されるべきである。

最後に、Henry Sweet の見解について少し触れて見たいと思う。Sweet は *A New English Grammar* の“Verb”のところで、この問題の説明を試みている。Sweet は目的語を伴わない他動詞の用法として、I see という、つまりそれが I see what you mean を意味するのにかかわらず、what you mean は文脈から“了解”されるものとして、省略される場合に触れているのは注意されてよいことである。

そして、この場合の *see* は完全に他動詞であると述べている Sweet の考えは正常であると言うことができよう。そして、又 Sweet は *blind men saw* のような例を出して、これは盲人が“一般の物”が見えた、つまり、“視力を得た”ことを意味し、目的語の意味が漠然として不確定であるから、この場合の *saw* は半自動詞 (*half intransitive*) であると説明している。同じ動詞 *see* の目的語をとらない用法について、完全な他動詞と半自動詞を区別していることは注意されてよい。

更に、Sweet は目的語のない他動詞のもう一つの用法として、*the book sells well* と *meat will not keep in hot weather* を例示している。

そして、これらの文の主語の *the book* と *meat* とはそれぞれ、*sell* と *keep* の論理上直接目的語である。そして、*the book sells well* は、実は *they are selling the book well* の意味にひとしいが、*they* が不定の意味を表わす語であるために、表現されずに *the book* が表面の主語の位置に出てきたというように説明されるのである。このような視点から、Sweet は問題の構造における *sell* や *keep* を受動動詞 (*Passival verbs*) と称しているのである。*book* や *meat* を Sweet はやはり、売られるもの、保たれるものとして見ているが、それと、正規の受動態 *is sold* や *is kept* との意義の相違については Sweet は積極的な認識は持っていないようである。

これについては Jespersen はもっと積極的な意味のちがいをしていると言える。Jespersen⁽¹¹⁾ によると、例えば、*his novels sell well* というような時には、その本の広汎な売れ行きの原因として、或る程度まで、その本自体の積極的な力によるものだと考えるものであって、本屋の活動力のことは余り考えていないのである。従って、その文は主語の特性と感じられる何ものかを叙述しているのであると説明される。明らかに Jespersen は能動形 *his novels sell well* にこれの受動形と異なる特徴を見出していると推察されるのである。

ところでこの問題の構造について、最近の *English Studies*⁽¹²⁾ に Free University of Brussels の Eric Buyssens という人が、非常に精密な啓発される

ところの多い論文を發表している。その中で、氏は *his novels don't sell* と *his novels are not sold* とを比較して、後者の文に *passive voice* があると思うのは間違いであると指摘する。つまり後者の文は *copula be* のあとに *complement* が来たのであり、この文は“売れること”には関係なく、その結果に関する叙述である。つまりその小説は依然ある、売れ残っているということになるのだと説明されている。更に氏は、*This fashion in love spread widely* と *This fashion in love was widely spread* とを対照させて、後者の文は *This fashion in love was popular* となり、これはもはや受動態ではなく、ここの *be* 動詞は *passive voice* (略して PV) の助動詞ではなく、補語を従える *copula* であるとする。そして前者の文こそ *the active voice with passive meaning* (略して AVPM) であると説明する。もちろん AVPM でも PV でも意味の変化が起らないこともある。*The plans worked out successfully* と *The plans were worked out successfully* とでは同じ意味になる。*His hat blew into the river* と *His hat was blown into the river* も意味は同じである。しかし、このような場合を除き、どちらの動詞形を選ぶかという場合には、それは意味の相違によって条件づけられることは明白であり、或る場合には AVPM こそ受動の意味を表わす唯一の方法であると結論している。そして AVPM の有利な点としては、*be* 動詞と過去分詞の結合による意味があいまいさを生じた場合にも、AVPM はあいまいさを生じないことであり、それが AVPM がそれに対応する PV よりはるかに多用される理由になっていると結論づけているのである。

この外、E. Buysens は *The book is selling well* と *The book sells well* とを比較して、前者は限定された継続を表わしているが、後者は継続には言及しないと述べている。そして氏は続けて次のように言っている。

But these two sentences can imply that the extensive sale depends on the characteristics of the book, and both can imply that the extensive sale results from some external circumstance: from a good publicity, for example.

継続期間の問題を別にすれば二つの構造が共通の意味を具えていると断じているわけで、示唆に富む所見と言うべきである。

この外、この問題について変形文法の立場からの解釈を試みても一つの方法であると信じられる。変形文法によると、*The book sells well.* と *Meat will not keep in hot weather.* の *sell* や *keep* は深層の他動詞であると思われる。又、*the book* や *meat* は深層の目的語と考えるべきものである。しかし、それが話題化 (Topicalization) という変形規則によって表層構造では、*the book* と *meat* が主語の位置に現れる問題の文が表出されたと思われるのである。言い換えれば、文の先頭(一番左端の位置)に在る *the book* や *meat* はいわゆる“話題”であって、文の「主語」という概念ではないという見方であり、又 *sell*, *keep* を含む部分は、“話題”に対する“評言”(comment)と考えるとよいものである。

前述の Jespersen の説などは問題の文の主語の *book* や *meat* の内面的性格を意味的に掘り下げた解釈で、主観的な面も感じられるが、変形文法の思考では、人が発話に際しての、情報伝達の立場から見ている面があり、面白い対照をなしている。しかし、言語の実際に迫るためには、これらの解釈は共に重要視するべきであると思われる。

3. 述部の構造

述部の構造の中でその核を成すものは言うまでもなく動詞である。そしてその動詞のタイプが文型を決定することになる。この動詞と構造型については、これまでいくつかの見解が出されている。

Onions は述部の形式を5つの基本形式から成ると見ている。学校文法でいうところの5文型はこの考えに準拠していると言うことができる。*Onions* によれば、*There was peace.* のような文では、*there was*='existed' とみて、

Peace | was [動詞] there [付加詞]

と分析される。つまり述部が付加詞 (Adjunct) を伴った第一形式の文とみているわけで、なかなか示唆的であると言える。又、主+動+目の構成する第三形式

の文 *Cain killed Abel* のような文が受動構文に変えられた場合を、

Abel [主語] | *was killed* [動詞] *by Cain* [付加詞]

と分析し、第一形式の文であるとする。

又、吾の注意を引く点としては *Conscience bids me speak* のような文を *me* と *speak* の二つの目的語を持ついわゆる第四形式の文（主+動+目+目）に分類していることである。原形不定 *speak* を間接目的語としている。又、*Onions* によれば、*I told him to speak* の文が受動構文に変れると次のように分析される。

He [主] | *was told* [動] | *to speak* [目的語] *by me* [付加詞]

つまり第三形式の文が生ずることになる。しかし、上記の文と *He was told a secret by me* とは平行的に考えるのは無理のように思われる。問題の文の *to speak* は話すことをではなく話すように命じられたと考えられるべきと思われる。前述の *Conscience bids me speak* の原形不定詞の *speak* は言うまでもなく、今見た *to speak* をも目的語とみることには抵抗を感じるのである。何故ならば、これら *speak* と言い、*to speak* と言い、共にこの場合、副詞的修飾語と見るのが自然であると思われるからである。

又ここは当然議論の分かれるところであって、*Onions* は又 *We bade him speak* のような文を主部 *We*、動詞 *bade*、目的語 *him speak* と解釈して、つまり第三形式の文として考える。*him speak* を目的語としているのは、*Jespersen* の目的語としての不定詞 *nexus* の見解に類似していると言える。但し、*him speak* = *that he should speak* としているのは解説のためのことと考えるべきであろう。何故ならば *We bade that he should speak.* のように *bade* が *that-clause* を目的語にとる構文は現実の用法としては可能ではないからである。

他方、上述のような文を変形文法では次のように考えることも注意すべきである。

[(We)] NP+[(bade)vt.(him)_{NP}⟨he would speak⟩_S] VP.

つまり、主文に副文が埋め込まれたものとみる点が相違しているのである。

このように若干の欠陥があるにせよ、Onions の 5 文型は極めて凝縮された、密度の高い、優れた形式であると言ってよいものである。

この Onions の所論に対して、石橋幸太郎氏⁽¹³⁾ の分析をみることにする。石橋氏は叙述構造を形態的に、体言叙述と用言叙述に分けている。体言叙述というのは動詞の内容が希薄になって叙述の中心が動詞から述詞に移動したものを言う。他方用言叙述は叙述の中心が動詞に存するものとされる。そしていわゆる不完全自動詞が体言叙述にあてられ、完全自動詞が用言叙述の中に入れられているというところに特色がみられるのである。更に体言叙述は動詞が形式語の場合と実質語の場合とに二分されている。そして動詞が形式語と場合として、(a) 述詞が名詞の場合 (例 *She is a charming girl.*) (b) 述詞が形容詞の場合 (例 *She is very charming*) に分類している。しかし、*She is in the garden.* のような副詞句の場合もあるのだから、述詞が名詞、形容詞、副詞の場合と三つに分類した方がさらに良かったのではないだろうか？ 又、用言叙述の中の第 3 の文形式つまり直接、間接の二重目的語を持つ構造の(a)と(b)に分けたその(b)の中に *I asked him to start at once* という文が入っている。そして、又、第 4 形式の文つまり、不完全他動詞の構文が、(a), (b), (c) に分類されたその(c)の中に *I helped him (to) do it.* が入れられている。しかし、*I asked him to do.....* の構文と *I helped him to do.....* の構文とは同じ構造の文として捉えてよいのではなかろうか？ *I asked him to start at once.* は私はすぐ出発するように彼にたのんだと考えられ、この不定詞句は名詞ではなく、副詞的な用法のように思われるのである。因みにこの場合、変形文法では [(I)]NP+[(asked)vt•(him)NP•<he starts at once>]VP と分析され、又、[(I)]NP+[(helped)vt•(him)NP•<he does it>]VP とそれぞれ分析され、この不定詞句の部分は同じ基底構造から派生したものとみる点、注意さるべきである。以上 2 点が石橋氏の所論に対する私の comment である。

更にこの問題について、Quirk, Greenbaum, Leech, Svartvik による *A Grammar of Contemporary English* の説くところを見ることにする。同書では、

述部の構造を Onions による 5 形式から 7 つの形式にふやしている。その中でも特に注目されるのは、SVOA の形式として出されている I put the plate on the table. という文である。つまり、I は S で、put は V、the plate が直接目的語で A は副詞である。ただここで注意すべきことは、A である on the table が補語や目的語の中でも特に直接目的語と同様に重視されている点である。上記の文で on the table が無かったならばその文は不完全であると見ているのである。

つまり、on the table は動詞 put を補足するものとしての義務的要素 (obligatory elements) であるということに着目している点意義深いと言わねばならない。とかく単なる修飾語の地位にとどめられていた副詞が特定の文によっては重要な機能を果たすということを認めた点にすぐれた特色があると言ってよい。因みにこのような on the table を中島文雄氏⁽¹⁴⁾は Adverbial object と論じている。中島氏によれば、この on the table は動詞 put に対して相関関係による限定の機能を果たしていると考えられる。それは単なる場所規定ではない。場所規定というのは He sang on the street の on the street のことを言うのである。この on the street は歌うという動作と直接の関係はなく、ただ「街上で」という場所規定をしているだけであって、つまり副詞的修飾語にすぎないものである。副詞的目的語である以上、それは義務的要素であることは自明の理である。

上述の場合以外に、又、*A Grammar of Contemporary English* には He is without a job. や We kept him off cigarettes の without a job や off cigarettes も義務的要素とみている。義務的付加詞はたいいてい「場所」の副詞であるが、上述の付加詞は「広い比喩的な意味で」用いられた場合としている。更に、They treated him kindly. の kindly のようにとうてい「場所」の観念のない付加詞もあることを指摘していることは興味深いことである。

Hill はその *Introduction to Linguistic Structures* で叙述構造を 7 つの形式で分析している。形態重視の立場から分析しているので、従来の見方とは異なっている点が気付かれる。例えば S (主語) × P (述詞) × C (補足語) の形式で C が

名詞の場合として、This seems a big price. This brings a big price. を例示している。これらは外部言語形式は同じであっても、内部言語形式が異なることは明らかであろう。又Cが前置詞句の場合として、John went to town. と John looked at Mary. を示している。to town や at Mary が補足語とみられている点は注意されてよい。これは S×P×A(文の付加語)として分析している形式に属する John sings in the shower. と対照させてみると興味深い。両者の前置詞の機能を形態的に区別しているのである。これは前述したように、中島文雄氏の単なる場所規定の副詞的修飾語と、動詞に対して相関関係による限定の機能を果す Adverbial object との区別に通じるものがある。

ところで Jespersen⁽¹⁵⁾ は John looked at Mary. のような文は SWO と分析する。W とは composite verbal expression と称せられ、look と前置詞 at を結合して一つの機能単位とみるのである。そして、これは他動詞を形成し、Mary は目的語となる。受動態の Mary was looked at by John が可能であることがそれを証明すると言う。たしかにこの考えは根拠がある。しかしこの方式をすべてにあてはめると無理がゆくとと思われる。例えば、Jespersen は *Analytic Syntax* で look at something=consider, regard を示し、又 walk with someone=accompany を示している。前述したように、look at の場合は一つの機能単位として、受身も可能であるから、他動詞句として分析が可能である。しかし、walk with someone=accompany とすると、Jespersen は look at と同じように他動詞句の立場からこれを見ているような印象を与えずにおかぬのである。ところがこれは疑問を生ずる。例えば、I was walked with by John. という受身が可能であろうか？ Jespersen は実例を挙げていないので解らないが、疑問を感じざるを得ないのである。

F.R. Palmer⁽¹⁶⁾ はその“英語動詞の言語学的研究”で今述べたような動詞と前置詞が結合して一つの意味単位を成すものを前置詞付動詞 (Prepositional verbs) と呼んでいる。そして、受動変形のテストが前置詞付動詞であるかを確立する助けにはならないと言う。She slept in the bed 受動変形→The bed was

slept in. They sat on the chair 受動変形→The chair's been sat on. がそれぞれ可能であっても、これらを単一の単位、すなわち、前置詞付動詞として扱うことは、妥当性がないと見ているのである。つまり、Palmer はこれらを「動詞+前置詞」と考えるのである。しかし、F.R. Palmer がこれらの sleep in や sit on を何故、動詞+前置詞という考えに固執しなければならぬであろうか。Palmer は積極的な理由は何も述べてはいないのである。受動変形テストに合格する以上、これらを前置詞付動詞、つまり他動詞句を認めてもよいのではなかろうか。

He slept in this bed のような文について、中島文雄氏⁽¹⁷⁾は「このベッドで」ねたという場所規定なら、Adverbial modifier となって受動態はつukれない。しかし「このベッドに」ねたというなら Adverbial object になると考えられ、Her bed this morning had not been slept in. のような受動態が可能になると述べている。日本語の「ベッドで」と「ベッドに」の微妙な差があるとみている。示唆的な意見であるが、原沢正喜氏⁽¹⁸⁾によると、Seoul has been fought four times (京城は4度戦場となった) の実例が示されている。又、Nida⁽¹⁹⁾ には His clothes were slept in. の例文が出ている。又、Palmer は The hill's been run down (by a lot of people) (その山は、多くの人々によって) 駆け降りられてきた) の例文を挙げて、この文が不可であるか確信がもてないと述べているのであるが、この種の受身文は Nida に The hill was walked up. The steps were gone down. の例文が示されている。このように見てくると、自動詞+前置詞の形式の他動詞化の問題はかなり微妙な側面を持っているようで英語の native speaker の間でも不確定要素が内在していると言えるのである。

思うに、動詞の他動性については、微妙な程度の差異があると言ってもよいと思われる。例えば live a happy life, や die a sudden death のような、live や die は同族の目的語のみしかとれないという意味で、もっと多くの目的語をとれる eat, や drink, や take などの動詞に比べると他動性が弱いと言うことができるであろう。しかし、いくら弱くても、この live が他動詞でありうることは、His whole life seemed to be lived in the past. (Jespersen) があるこ

英語動詞再考

とによっても明らかである。一方では、自動詞も又他動性を取得することができるのである。例えば、I walk three miles. とか They work two hours there. などと書かれる。それぞれの文の three miles や two hours はいわゆる“副詞的対格”(Adverbial accusative)と呼ばれるものである。両方の文で、two hours や three miles はそれぞれ自動詞 work や walk のあたかも目的語のような機能を果していると言うことができる。ここに自動詞から他動詞への移行が感じられるのである。これを証するものとして

hours only per day are worked. a mile can be walked in twenty minutes
(共に Jespersen から)

が可能になるのである。名詞が形容詞の機能を得たり、又形容詞が名詞の機能を取りうるができるように、動詞というカテゴリの中で、自動詞と他動詞との間に機能の交替が起っても、おかしくないと言え言えるのである。

最後に、F.R. Palmer 著の“英語動詞の言語学的研究”に若干触れてこの稿を了えることにしたい。

この“英語動詞の言語学的研究”は動詞句の形式と機能を言語学的に構造的に記述したものであるが、助動詞を中心として、本動詞を一つ含む単一句と、本動詞を一つ以上含む複合句とに分割している中の複合句について少しく触れて見たいと思う。

F.R. Palmer は本動詞を連鎖詞(Catenatives)と連鎖詞でない動詞という観点から分類する。複合句というのは、I like fishing. I want to go to London. のような文の like や want の如くそのあとに他の動詞を伴うことのできる動詞、つまり一つ以上の動詞を含む句のことを言うのであるが、又 like や want は fishing や, to go のような動詞を従えることができるので、これらは連鎖詞と称せられるのである。動詞を基本的に、連鎖詞と非連鎖の観点から分類する点に、F.R. Palmer の構造的言語観がよくあらわれていると言えるのである。さて、Palmer はその連鎖詞を4つの構造に分類する。

1. 不定詞のみ 例: He helped wash up.

英語動詞再考

2. to+不定詞 He wants to go to London.
3. -ing He keeps talking about it.
4. 過去分詞 He got hurt in the scramble.

そして、これらの構造を基礎にして、名詞句を伴わない動詞を7つに分類する。更に、名詞句を伴った構造、すなわち、2つの動詞の間に名詞句が存在し、その名詞句が2番目の動詞の主語になるような構造が考察される。

1. I saw them come.
2. I advised them to come.
3. I saw them coming.
4. I saw them beaten.

これらの構造はまた、受動変形文が可能か否かの観点からも考察されて、大多数の英語の動詞は、8つの主要類に分かれるとされるのである。すなわち、

- (a) 構造1, または構造1と2, 受動あり: help.
- (b) 構造1, または構造1と2, 受動なし: let.
- (c) 構造1のみ, 受動あり: ask.
- (d) 構造1と3, 受動あり: see.
- (e) 構造3のみ, 受動あり: keep.
- (f) 構造2, 3, 4, または3と4, 受動なし: like
- (g) 構造3のみ, 受動なし: remember.
- (h) get は、構造2, 3, 4で起こり、受動を持つ。

以上で大体理解されると思うが、動詞の構造型についての体系的記述がなされている点に、F.R. Palmer の動詞論の特徴がみられると言える。

ところで上記の構造体系の中の(f)のところ疑問点を感じられるので付言しておきたい。(f)の中には、like を代表とする動詞が中心となって網羅されている。detest, dislike, enjoy, fancy, hate, love, want, etc. である。そしてこれらに prevent を追加しなければならぬと、Palmer は述べてこう説明している。He prevented them crossing the field. の受動形は、The were prevented crossing

the field ではないからであると述べ、They were prevented from crossing the field. という全く別の形式が存在すると言っている。しかし、He prevented them crossing the field. の受動形が、They were prevented crossing the field. ではないと言うのは不可解と言わねばならない。何故ならば、OED にも次のような例文が見えるからである。

The only method.....by which *the French can be prevented settling* on the coast of Newfoundland.

She had been prevented telling me her story.

Sedgwich is prevented joining you by a misfortune in his family.

又、Nida の“英語シンタクス概要” p. 127にも、*He was prevented crossing* the border. の例示が見えるのである。従ってこの prevent は上記の構造型(e)の keep を代表とする動詞類の中に入れらるべきであると判断されるのである。

注

(1) *Language*, 12. 10

(2) *The Structure of English*, p. 80

(3) 半田一郎訳『注文法の原理』p. 102

(4) 半田一郎訳注『文法の原理』p. 87

「動詞は文を組立てるのに特に貴重な活要素であって、文はほとんど常に動詞を含み、動詞がなくて完結文と呼ばれるような結合がみられるのは例外としてのみである」

(5) *A Dictionary of Contemporary American Usage “verbs”*

(6) *The Structure of English*, p. 175

(7) 川本喬訳『意味論入門』

(8) *Understanding Grammar*

(9) *Leech, Semantics* (邦訳安藤貞雄『現代意味論』pp. 154~55)

(10) *A Grammar of Contemporary English*, p. 344

「He is eating is an instance of clause-type SV rather than of SVO. (with optional deletion of the object)」

(11) *Modern English Grammar* III. 16.84

英語動詞再考

- (12) Vol. 60 number 6 1979 pp. 745~65.
- (13) 『英文法論』 p. 476.
- (14) 『英文法体系』 p.156.
- (15) *Essentials of English Grammar* 12.5.
- (16) 安藤貞雄訳注, 大修館
- (17) 『英文法体系』 p.160.
- (18) 『現代口語文法』現代英文法講座
- (19) 太田朗訳『英語シンタクス概要』英語教育シリーズ

参考文献

- Bolinger, D. *Aspects of Language*, N.Y. 1968.
- Bloomfield, L. *Language*, N.Y. (Holt). 1933.
- Buyssems, E. "The Active Voice with Passive Meaning in Modern English"
English Studies. Vol. 60.
- Evans, and Evans, C. *A Dictionary of Contemporary American Usage*. N.Y.
1957
- Fries, C.C. *The Structure of English*. N.Y. (Harcourt) 1952.
- Joos, M. *The English Verb* (the University of Wisconsin Press). 1964.
- Jespersen, O. *A Modern English Grammar*. 7 Vols. London (Allen) 1909-49.
- Jespersen, O. *Analytic Syntax*. London. 1937.
- Jespersen, O. *Essentials of English Grammar*. London (Allen). 1933.
- Jespersen, O. *The Philosophy of Grammar*. London. 1924.
- Leech, J. 安藤貞雄訳『現代意味論』研究社, 1977.
- Nida, E. 太田朗訳注『英語シンタクス概論』大修館 1957.
- Onions, C.T. *An Advanced English Syntax*, London (Kegan Paul). 1904.
- Palmer, F. *The English Verb* (Longman). 1974.
- Palmer, F. 川本喬訳『意味論入門』白水社, 1978.
- Palmer, F. 安藤貞雄訳注『英語動詞の言語学的研究』大修館 1972.
- Quirk, Randolph, Greenbaum, Leech and Svartvik.
A Grammar of Contemporary English. London. (Longman). 1972.
- Roberts, P. *Understanding English*. N.Y. (Harper). 1958.
- Strang, B. *Modern English Structure*. London. 1962.
- Sweet, H. *A New English Grammar*. 2 vols. Oxford. (University Press). 1891,
1898.

英語動詞再考

中島文雄『英文法体系』研究社，1957.

尾上政次『現代米語文法』研究社，1957.

安井稔編『新言語学辞典』研究社，1971.